



長い間小中学生の教育に携わらせていただいている者として、この機会に子ども達の読書について日頃感じていることを述べさせていただきます。

読書の重要性については、前号で中央図書館長さんが書かれていたように、今更言うまでもないことです。特に心身共に成長途上にある子ども達にとっては、欠くことの出来ないものと言ってよいと思います。子ども達の情操を養い知性を磨くために大きな役割を果たしているのが読書です。

このように重要な読書について、子ども達の関心が薄れてきたことが心配されてから何年かが過ぎました。この間読書に係る多くの方々の努力がなされ、その成果が目されました。このことについて、最近次のような報告を目にしました。その報告には、「1980年以来増加の一途をたどっていた中学生・高校生の不読者（その年の五月一ヶ月間に一冊も本を読まなかった者）の数が、昨年度中学生

に限って歯止めがかかった。」と述べられていました。このことは多くの関係者の努力が実を結びつつあること、子ども達に適した読書環境を整え適切に指導すれば、子ども達の関心を読書に向けてやる事が出来ること等を示唆しています。私たち大人はこの事実には自信を持ち、それぞれの立場で息長く読書指導

子ども達の生活の中に読書を

佐久市立図書館協議会副会長
青木 要

に当たりたいと思います。

このことに関係して、学校の読書活動について触れてみようと思います。学校での読書活動と言えば、まず朝の一斉読書が挙げられます。子ども達の読書への関心をたかめるために多くの学校で実践されています。私の学校でも毎朝実施されています。直接指導に当たっている教

師の話から、子ども達の関心を読書へ向ける良い機会となつていくことがうかがえます。

このような試みは、各家庭でも気軽に出来るように思います。我々大人が読書している姿を子ども達に見せること、また、時には家族で図書館に足を運ぶこと等もよいでしょう。合併に伴い市内四図書館が一層充実しました。その様子を目の当たりにすることは、子ども達の読書に大きな影響を及ぼします。

このように学校、家庭、地域がそれぞれの立場で出来ることに取り組むことが、子ども達の読書への関心を高めることに繋がるように思います。

地域全体の地道な努力で読書を通して情操豊かな知性溢れる子ども達を育成しましょう。



朝の一斉読書



利用価値の多い

トチノキ(栃・橡)

佐久市立中央図書館南側、公園の芝生沿いに、高木が立ち並んでいます。「トチノキ」の並木です。

トチノキは、本来は山地に自生し、高さが三十メートルにも達する落葉高木です。北海道から九州まで、広く分布し、栃木県では、県木に指定されています。



公園・舗道の緑蔭樹

春の芽吹きに続いて、手のひらのような大きな葉を茂らせま

す。初夏には、枝の頂に白い花を、大きな穂状につけます。

山の木には花の蜜を求めて蜂が訪れますから、重要な蜜源樹として利用されます。

パリの並木で有名なマロニエは、「西洋トチノキ」と呼ばれる近縁種です。

「仰ぎ見る樹齢いくばくぞ

栃の花」
(杉田久女)

トチの実・種子の利用

秋には、実が熟します。厚い皮が割れると、中から粟に似た光沢のある種子が出てきます。

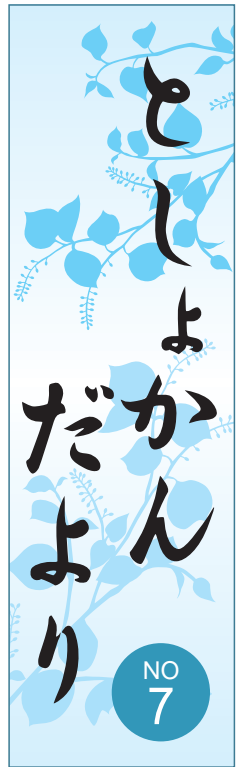
種子には、デンプンを多く含みますから、水に晒してアクを抜いてから、栃餅や栃だんごを作ります。昔、アク抜き技術は、「嫁の腕の見せどころ」と言われたほど大変な作業でした。

「橡の実や幾日ころげて麓まで」
(小林一茶)

夏から秋にかけて、トチノキを観察してみましょう。実が熟れたら、種子を拾って、子どもさんと一緒に笛作りをしても楽しいです。



(岩村田 依田豊)



PTA親子読書運動の歩み

この素晴らしき営み

中央図書館長 木内 芳 則

草の根の読書運動

昭和二十五年九月「PTA母親文庫」は、信州大学教育学部附属長野小学校で産声を上げた。提唱者は、同校のPTA教養部長でもあり、県立長野図書館長でもあった叶沢清介氏であった。混沌と窮乏の中で、次代を担う子どもの前に立つ母親の教養なくしては、児童・生徒の教育・文化の向上はあり得ないとの自覚と共に、家事や子育ての多忙な生活の中でも母親自ら本を読まなければならないという主体的な渴望もあった。

翌年の昭和二十六年には上伊那に、さらに十二月には更級や南佐久にも配本所ができた。その後、瞬く間に全県下に広がり各都市に配本所が開設された。この配本所方式は、先ず、各学級で、四人構成のグループを

つくる。四十人学級では、十のグループができることになる。教養委員が配本所となる公共図書館等から十冊の本を借りてきて自分の子にそれを持たせて学級へ運ぶ。十冊の一冊一冊にはグループを明記したスリッパを入れておく。その日の午後、子どもは家へ帰って「お母ちゃん、本を持ってきたよ」と母親に手渡す。

会員数十三万人に達する

この方式はやがて長野県中の母親の共感を呼び母親の会員数も十三万人に膨れあがった。延べにして六百万冊余の本が母親の手から手へ渡り、読書活動は隆盛期を迎えた。「家の母ちゃん勉強始めた。ぼくも勉強が好きになった」という家庭環境が醸成されたのだ。一方、長野県図書館大会には、六割以上の母親

委員が占めた年もあった。

激減している会員数

平成十七年十月一日現在の会員数は、全県下で四千人弱である。最盛期の三十分の一にも及ばない。県下には、十五配本所のうち、休会中の配本所も三カ所あり、長期凋落傾向は歯止めが掛かっていない。

各校の教養活動の多様化、学校の多忙化、母親の職場進出、さらにも本が手に入る環境等々も要因であろうが、TVの普及も読書離れに影響を及ぼしている。

健闘している佐久地域

昨年の長野県図書館大会（佐久大会）で佐久市PTA親子文庫の業績が認められ表彰された。

この他に現在は、北佐久PTA親子文庫推進の会・軽井沢PTA親子文庫推進の会が活動している。配本活動もさることながら、読み聞かせやボランティア活動にも力を入れている。目下の課題は、現在の旧佐久市PTA親子文庫を合併前の白田・望月・浅科に拡大することが、佐久PTA親子文庫運営委員長の願いである。その実現へ向けて配本所を持つ公共図書館として支援して参りたい。

中央図書館

図書館一日司書を体験して

五月二十七日(土)中央図書館で中込小学校六年生の菊池竜矢さん、高橋奈津美さん、高見沢香怜さん、小林楓さん、高野恵里花さんが図書館一日司書を体験しました。

司書の人たちの大変さ...

ぼくは、いつも借りに来る時働いている人のやっている事が「楽しそうだな」と思っていたので、今日一日体験できてとてもうれしかったです。特に、バーコードリーダーを使うのがとても楽しかったです、そして、真剣にやりました。

借りに来る人に迷惑がかからないように、教えてもらう時には、しっかり話を聞いていました。それに、本を元にもどす時に何番台かも覚えられたし、いつもこの仕事をしている司書の人たちの大変さも、すごく分かりました。(中略)

学校の図書館でもしっかり当番活動を忘れないでやりたいし、将来図書館で働きたいです。しっかりできて良かったし、とても楽しい貴重な体験でした。

(菊池竜矢くん)



(高橋奈津美さん)

これまで、この図書館を何回も利用していて、「楽しそうだな」とか思っていました。それが実現することになると聞いた時はうれしかったです。けっこう楽しそうな仕事だと思っていて、でもやってみたら、カウンターをやっている時はお客さんがたくさん来て、忙しくて大変だったし、本をしまったりする時もつかれたので、今日、一日司書体験をして、図書館で働く人がどのくらい大変なのか、その大変さがとてもよく分かりました。(中略)貴重な体験ができて本当によかったです。